

M. R. ムガル「インダス文明の起源に関する 新研究」とその形成期諸文化をめぐる概念規定

小西, 正捷

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

35

(発行年 / Year)

1981-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005199>

M. R. ムガル「インダス文明の起源に関する新研究」とその形成期諸文化をめぐる概念規定

小西 正捷

序 言

1980年2月、筆者はパーキスターン中央政府考古局・調査発掘主任官のムハンマド・ラフィーク・ムガル博士より、タイプ印刷された論文の寄贈をうけた。氏が同年1月に、ハイデラーバード・ミュージアムにおいて「シンド公文書館講演^{アーカイヴズ}」の一つとして行なった講演の要約である¹⁾。ザラ紙9ページに及ぶこの要約文は、氏が1970年にペンシルヴェニア大学に提出した学位論文²⁾以来一貫して追求してきた、インダス文明の起源に関する問題提起と研究の現状をよく紹介している。これは、すでに邦訳もなされている1973年の時点における彼の論考³⁾とともに広く読まれるべきものであり、いずれかの機会を得て訳出紹介を試みたいと考えて氏に許可を求めたところ、幸にも直ちに快諾を得ることができた。そのさい筆者は、ムガル氏から、この要約がやがて『シンド学会誌』に転載されるべきものであることを伝えられたが⁴⁾、それでも同誌がサーキュレーション上比較的限られ、入手しがたいものであるため、それによって、以下に試みようとする同稿の紹介の意義が大きく減じたとは必ずしも考えていない。

しかし同稿を訳出するにあたっては、筆者は次の2点を付け加えることが必要と考えた。すなわちまず第1に、文献注(邦語文献を含む)を主体とした訳注を付すこと。そして第2に、これまでも議論の多い、(成熟期^{マチュア})ハラッパー文化以前の諸文化のステージ上の概念規定に関して、短い解説を付すことである。ことに後者の問題に関しては、ムガル氏の見解とは必ずしも軌を一にしない筆者の見解を、いささかなりともここに述べておく必要を感じた。筆者は最近、ほとんどこの作業と平行して、『インダス文明』なる著書を共著であらわしたが⁵⁾、ムガル論文の翻訳である第Ⅰ部につづく第Ⅱ部の解説は、同書に採用した「インダス文明形成期」なる概念を紹介することにもなるはずである。

I: M.R. ムガル「インダス文明の起源に関する新研究」

南アジアに最古の文明が、インダス流域におけるハラッパーとモエンジョ・ダローの2大都市遺跡に劇的に発見されて以来、すでに60年近くがたった⁶⁾。研究文献上、それは「ハラッパー文化」とか「ハラッパー文明」とかさまざまに名づけられてきたが⁷⁾、最近より一般的に用いられるようになった「インダス文明」の語が、最も適切である。それはインダス本流と、(今は干上がってしまった)ガッガル=ハクラ湖河床をも含んだ、過去から現在にわたる、その支流によってうるおされる全地域を包含しているからである。独立時〔1947年〕前後に、パーキスターンとその近隣の地域においてさらに行なわれたフィールド・ワークによって、インダス文明は、50万平方マイルにも及ぶ地域を覆う、アジアのいかなる既知の文明よりも地理上広範にわたるものであることが明らかにされてきた⁸⁾。さらにごく最近、バダフシャー地方に近い北部アフガニスタンに発見された特徴あるハラッパー文化遺跡⁹⁾は、これまで知られたインダス文明の限界を、インダス流域を越えてソ連国境にまでおし広げた。インダス文明は、〔西は〕アラビア海の沿岸に広がり、〔南東は〕西インドのカッチ=サウラーシュトラ地方、〔北東は〕ガンガー=ヤムナー両河地方にまで、すでに広がりをみせている。

1921年来何年にもわたって行なわれた、モエンジョ=ダローやハラッパーほかの諸遺跡の集中的発掘は、「大インダス流域」——すなわちインダス本流とガッガル=ハクラ河系による全流域——における広域調査ともどもに¹⁰⁾、インダス文明に関するわれわれの知識を大幅に豊富にした。これらの調査・発掘によって明らかになってきたインダス文明の姿は、およそ前2400-1750年¹¹⁾にわたってインダス流域に居を占めた、高度に発達をとげ、十全に都市化を果たした社会の様相である。彼らは、増大する人口を支えるに充分な資源を備えた安定した経済基盤をもち、労働力を動員し、専門職を生み、また北部アフガニスタンやメソポタミア、ペルシア湾岸のようなはるか遠方とまで遠距離交易や交換を行なうほどに充分な、余剰生産物を獲得したものと考えられている。これらのことはすべて、そこに社会階層が形成されていたことを示すものでもある。彼らのみごとな計画都市にはさまざまな公共サービスがあり、その目を奪う公共建築物、市民や軍隊用の手の込んだ建造物、また穀物倉や、石器・金属器・印章・秤用の錘・多様にわたる土器・祭祀用品・文字等にみられる規格化されたさまざまな物品は、すべてそこに、社会=政治的機関と宗教的機関が密

な相関関係をもって存在していたことをよく示している。前2400年ころのインダス流域にみられるこのような状況は、いずれも人類文化の発展段階における、完熟と都市化をとげた段階に特徴的なものである。

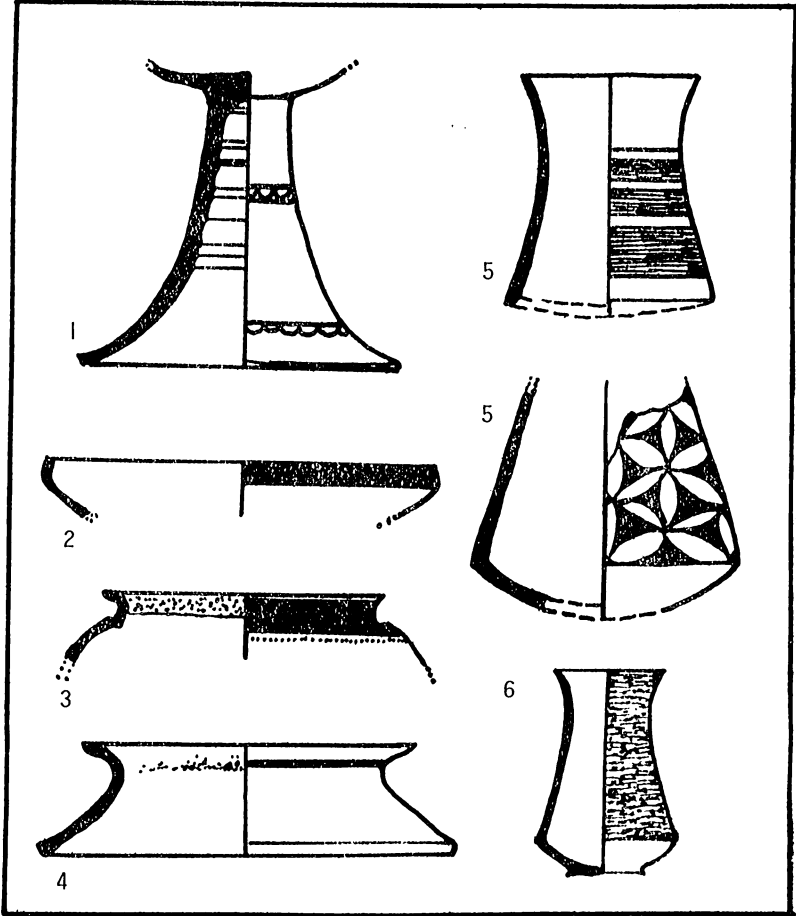
モエンジョ＝ダールと同時期の他遺跡をみても、ハラッパー文化の遺物にみられる完成度は、初期の発掘者にとって、きわめて印象的なものにうつった。彼らが発見した大都市にみられる文化遺物が、概しておどろくべき均一性を保っていることに学者たちは圧倒され、ついにはモエンジョ＝ダールやハラッパーに知られるようなハラッパー文化の規準によって、他のいかなる遺物をも、それにあてはめて解釈するまでとなった。かくて初期の発掘者たちは、「ハラッパー（インダス文明）」か「非ハラッパー」か、という〔遺物や遺構に関する〕2大区分を築きあげてしまった。そして非ハラッパー的な遺物がハラッパー文化の遺構下の層序に発見されるとき、それは（アムリがその例であるように）、単純に、「先ハラッパー」として片付けられたのである。

つとにジョン・マーシャル卿、E. J. マッケイ、M. S. ヴァッツ、ややのちにモーティマー・ウィーラー卿が発掘した多くの遺跡において、すでに充分に発達をとげた文明の段階をここにみいだした人びとは、インダス文明の起源に関する証跡が欠けていたこと、ないしはその認識の欠如によって、このように堂々たる大文明の様相が、「西アジア」すなわちメソポタミアやイーランからの基本的な知識や刺激をうけることなしに、南アジア〔すなわちインド〕に起こりうるはずがないと信じこんだ。当時得られた限りでのデータに基づくこのような解釈は、ときに渉々ながらも、その後40年近くも、ほとんどの学者たちによって繰り返されてきた。これらの論は、土着の人びとのもつ才覚や能力を全く認めようとせず、また人が永住するのに本来好適なインダスの地の生態学的諸条件を認めようとしない、暗黙の姿勢を示している。この地では、やがてさまざまな相関関係をもつ諸制度の出現と、その急速な発展を見ることとなり、さらにそれは、複雑で充分に都市的な文化、すなわちインダス文明へとつらなるものであったにもかかわらず——。その上、インダス文明の初期の形成期、もしくは発展段階を復原するだけの証拠が出そろっていなかった当時の状況にあっては、その文明を納得のいくように説明することはきわめてむずかしかった。たとえその起源に関する解釈の糸口がある種の遺跡に得られたとしても、それはただちに、インダス文明と何のかわりもない「外来」文化の特色をもつものとして無視されるか、あるいはただ「非」もしくは「先ハラッパ

ー文化」というラベルのもとに押しやられてしまったのである。たとえば、マジュムダールがシンド地方南部の数多くのアムリ文化諸遺跡¹²⁾に発見した遺物の重要性や、1950年にモエンジョ＝ダローの地下水位下の初期の層から得られた情報¹³⁾、また1946年にハラッパーに発見された〔ハラッパー文化以前の〕最古の居住の証跡¹⁴⁾などは、いずれもインダス文明の成熟期の文脈からの分析が多少なされたのみで、ほとんど真に理解されることがなかった。

学者たちが旧態依然の「西からの伝播」なる概念をくりかえし述べ伝えている一方、幾人かの考古学者たちは、古い法則の枠にとらわれずに、新たに資料の再考に着手した。1960年代になると、彼らはインダス文明の興起に関する、社会＝経済的かつ有機的なすぐれたモデルを提出し、その文化現象の理解に、新たな次元を開いた¹⁵⁾。しかしながら、ここでも再び、決定的なデータの不足によって、新たな解釈を支えることにはついになりきれなかった。インダス文明の起源は、いまだとらえがたいままに終わってしまっていたのである。

〔この点に関して〕決定的ともいえる大きな進展があったのは1950年代半ばのことであったが、それは、このようなインダス文明の開始に関するさまざまな理論化の行なわれつつあった只中のことであった。インダス川の左岸、すなわちモエンジョ＝ダローに向きあう位置にあるハイルプル地区コト＝ディジ遺跡がF.A.ハーン博士によって発掘され、そこからは、インダス文明初期の発展期に関する新たな証拠が明らかにされた¹⁶⁾。同遺跡では、モエンジョ＝ダローやハラッパーの証跡に比しうるような成熟期〔ないしは盛期〕のハラッパー文化の下に、17フィートの厚さの堆積があることがわかり、そこからは、ある種の土器様式や彩文のデザイン、また陶製の荷車やその車輪、三角錘・動物土偶・〔隅丸〕三角形の陶板のような遺物が出土し、またかつてはインダス文明の成熟期にのみ見られるとされてきた周壁までが明らかになった。これらの初期の遺物・遺構は、放射性炭素測定によって（5730年を半減期とするMASCA 修正値¹⁷⁾による算定）、前3155-2590年にあたるものとされている。「コト＝ディジ文化」と総称されるこれらの初期の遺物によって、モーティマー・ウィーラー卿がすでに1946年に発掘し、しかもハラッパー文化にとって「異質」(alien)とされてきたハラッパー遺跡自体の初期の層位も、かくて確固たる位置関係におかれるようになった。しかもF.A.ハーン博士によるコト＝ディジ遺跡の科学的発掘によって、今やこの新たな証跡は、インダス文明の起源に関する基本的問題に、決定的なものであることが明らかになったので



コト=ディジ文化の土器(F. A. Khan 1965により小西修正作図)。番号は本文の記述に一致。スケールはNo.2のみ1/8, ほかは1/4。

ある。

中でも最も重要なことは、「コト=ディジ文化」の層位が、同遺跡でもインダス流域の他遺跡においても、直ちにそれにつづくハラッパー文化の成熟期よりもさらに600年以上も古いものであることのみならず、この文化には、すでに、これまでに知られたハラッパー文化の最古の要素が含まれていた、ということである。すなわちコト=ディジ文化の全アセンブリッジは、年代上も文化概念上も、インダス文明の初期の発展期 (phase) に属するものであった。し

たがって、コト＝ディジ遺跡に出土し、かつて「コト＝ディジ文化」と名づけられていた初期の遺物は、「初期ハラッパー文化」のものと考えられねばならず、またこのことは、インダス流域における近年の調査・発掘によってますます跡づけられるようになっていく¹⁸⁾。

コト＝ディジの「コト＝ディジ」文化層に出土した初期ハラッパー文化のアセンブリッジは、多くのことをわれわれに教えてくれる。そのうちには、短頸で鰐のある球状壺を含む、特徴あるいくつかの土器の器形がある。しかしながら、このような明らかに「ハラッパー文化のものとは」異なる土器にまぎって、これまで成熟期ハラッパー文化に典型的と考えられてきた、次のような土器も発見された〔挿図参照〕。たとえば、(1) 立ち上がりが高い、もしくは低い種々の高坏、(2) 口縁直下に、ときに幅広の「黒色」帯状文があり、口縁が内湾して内側にスリップがけをした平浅鉢、(3) 口縁が外湾する貯蔵甕、(4) 輪状土器置き、(5) ときに底部近くにカリネーションをもち、〔胴部や頸部にこころもちくびれをみせる、概して〕円筒形をなす瓶形土器、(6) 赤色スリップがけをし、器壁の薄い、高台付きの瓶形土器——などがそれである。角のある神格を描きだした壺の器形ですら、モエンジョ＝ダーロの成熟期ハラッパー文化層に出土した同様のものに、よく似ている¹⁹⁾。コト＝ディジ遺跡の初期ハラッパー文化層に出土した他の遺物の多くの範疇も、同遺跡の成熟期ハラッパー文化層に発見されたものにきわめてよく類似している。たとえば〔隅丸〕三角形の陶板・陶製三角錘・荷車の模型とその車輪・縦長の両刃剝片石器・石核などがそれである。唯一の例外は、やがて十分な都市化をとげたのちに出現する凍石製の印章や、秤用の錘、またインダス文字のみである。この初期ハラッパー文化時代 (period) のコト＝ディジ遺跡には、ハラッパーやモエンジョ＝ダーロより 5-600 年も古い、目を奪う防御壁もある。

〔以上のような〕コト＝ディジでの証拠によって、モーティマー・ウィーラー卿がハラッパー遺跡に発見した最古の土器は、今や正しい年代の枠内に位置づけられるようになった。近年発見されたチョーリスターン地方のブートの表採遺物²⁰⁾、ムルターンに近いジャリールプル²¹⁾、タクシラーに近いサライ＝コラー²²⁾、そしてゴーマル川流域のグムラ²³⁾やラフマーン＝デーリー²⁴⁾出土の遺物もまた同様である。一方シンド地方南部では、アムリ遺跡から、同遺跡自体の明確に異なった土器文化「アムリ文化」にまぎって、いくつかの典型的なコト＝ディジ様式の土器が発見された²⁵⁾。この層の年代は、現在、前 3600-3320

年とされている。インドにおいても、パーキスターンで初期ハラッパー文化の諸遺跡が発見されたのと平行して、1960年代にカーリーバンガンの大規模な発掘が行なわれた²⁶⁾。カーリーバンガンの初期の層はコト＝ディジ文化と関連する遺物を明らかにし²⁷⁾、かくて広く散在する全証跡をどのように考えるかについての強力な基盤が、ここに置かれた。このように、これまでに得られた前第3千年紀初頭の文化的証跡に関する詳細な研究とその統合の結果からすれば、コト＝ディジ文化に関連するすべての遺物は、実はインダス文明の初期形成期、あるいは初期の都市文化相、初期発展期をなすものと結論づけざるをえなくなったのである。

インダス文明の興起に関する新たな理論的枠組の分析と提示が1970年に行なわれて以来²⁸⁾、パーキスターンではジャリールプル、グムラ、ラフマーン＝デーリー、ジャング、サライ＝コラーで集中的な発掘が行なわれ、またチョーリストターン(バハーワルプル)では4年に及ぶ広域調査が行なわれた。またインドではパンジャブ地方東部とラージャスターン地方北東部に調査が行なわれ²⁹⁾、これによって、多大な量の新データが入手できるようになった。この新たな証跡は、文化発展における初期ハラッパー期の様相をさらに詳細なものとしたのみならず、この時期概念を十全に実質的なものとし、すでに1970年に提出された新概念を充分確固たるものとしたのである。かくてこの新たな研究は、「西」からの「刺激伝播」という旧来の概念を粉砕したのみならず、インダス文明の出現に関するわれわれの理解に革命的転換をはかった。モエンジョ＝ダーロやハラッパーに残る遺物に知られるインダス文明の成熟期文化と同様に、それに先だつ初期ハラッパー、もしくは初期形成期の様相も、わずかな地域差はあるにしても、その物質文化上、きわめて注目すべき均一性を示すものであることは明らかである。またそれは、明らかに、インダス流域自体の全域にわたって広域に分布するものであり、かつインダス中原の(今日では涸河床となっている)ガッガル＝ハクラ川に沿って、最も密な分布を示すものであった。「初期ハラッパー期集落の分布のパターンは、成熟期におけるそれとほとんど重なりあうものであり、このことは、ハラッパーやモエンジョ＝ダーロのような巨大な都市センターが興起する少なくとも5-600年も以前に、それと全く同じ生態学的適所において、初期の集落が充分に適応をとげていたということを示唆している」[「 」内は原文はイタリック。本稿折込地図参照]³⁰⁾。

今日得られるこの証跡は、大都市センターに発見後のインダス文明ないしは

成熟期ハラッパー文化に典型的とされた多くの文化的特徴が、すでに遅くも前3100年ころには出現していたことを明らかに示している。初期ハラッパー期のいくつかの土器の器形や彩文は、成熟期に導入された新たな土器形式や彩文とともに、その後も用いられつづけた。初期ハラッパー文化〔原文単数扱い〕の広域にわたる分布は、「大インダス流域」や、それをも越えた〔地域に形成された〕初期の社会間に、相互に密接な関係や、技術的知識の共有があったことを示唆している。それらの〔遺物の〕示す様式上の均一性や広範な分布は、すでに前第3千年紀の初頭には確立していた規格化と、技法の専門化をよく示す。

集落のレイアウトにみられる規則性とその〔遺物の〕様式上の洗練は、発掘された初期ハラッパー時代のいくつかの遺跡に明らかであり、よく組織化された、安定した社会のようすがうかがえる。またコト＝ディジやそれと同時代の遺跡〔カーリーバンガン〕における周壁の存在は、初期ハラッパー時代におこりつつあった社会＝経済上の変化を物語っている。〔このような〕巨大な建造物を建てるには、かなりの規模での労働力と、経済力の獲得が必要とされるからである。さらに、当時余剰生産物が得られたということからは、すでに前3100年という早きにあつて重層社会が出現し、また河川流域という環境とその周縁の地の効果的利用が、みごとになされていたということが暗示される。

「大インダス流域」内と、またその外の地域との間に、遠距離交易がすでに初期ハラッパー時代に確立していたこともまた明らかである。ラピス＝ラズリ〔瑠璃〕は元来主として北部アフガーニスタン地方に産するものであるが³¹⁾、それはゴーマル峠のラフマーン＝デーリー、タクシラー近郊のサライ＝コラー、中部パンジャーブのジャリールプル、コト＝ディジ、またキルタル丘陵にほど近いパーンディ＝ワーヒーに発見されている。イーラーン南部、東アラビアを含むペルシア湾岸、またメソポタミアとの接触は、前第3千年紀初頭に年代づけられるモエンジョ＝ダローの「初期」の層に出土した、彫刻された凍石製容器の発見から立証される³²⁾。かくて「大インダス流域」が、きわめて大きな相互作用の行なわれつつあった範囲内での不可欠な部分をなしていたことは確かであり、その内にあつては、すでに初期ハラッパー時代に、諸地域をむすぶ密な紐帯が確立していたことが明らかである。当時の輸送に適切な方法が用いられていたことは、堅固な車輪をもった荷車の陶製模型と、〔それを索いたであろう〕牛の土偶の存在によって証明される。また前第3千年紀初頭の層序から発見された数多くの銅製品は、この有用な金属が、バルーチスター

ンやラージャスターンの鉱脈から、交易を通じて人びとの手にわたるものであったことを示している。

近年ラフマーン＝デーリーに発見された小形の印章や、チョーリスターン地方に出土したインダス文字[を思わせるもの]を含む線刻は、[文字を用いての]筆記に対する初期の企てを思わせるものである。²⁴⁾ おそらくはそこから、あの謎めいたインダス文字は発達をとげたのであろう。

要するに、前第3千年紀初頭におけるこの圧倒的な証拠は、物質文化において著しい均一性をもった広域にわたるある文化現象が、やがて統合されて、インダス文明の成熟期に大発展をとげるべき基本的諸要素の確固たるパターンをすでに備えていた、という結論を導きだす。事実モエンジョ＝ダーロやハラッパーは、さまざまな文化複合や、相関しあう社会＝経済＝宗教＝政治的な〔発展〕過程が頂点に達した、当然の結果をあらわしているにすぎない。これらの過程は、やがてインダス流域に十全な都市化が達成されるより500年以上も早く、すでに始まっていたのである。したがって、インダス文明の基礎が、すでに前第3千年紀の初頭に据えられていたとするのは至極妥当なことである。「汎インダス地域における文化統合度は、前第3千年紀中葉に大都市が出現する以前に、すでに達成されていた。したがって、その完熟した形におけるインダス文明は、これらの初期文化のアセンブリッジ〔原文複数〕からこそ発展をとげたのであり、これらの初期の諸文化は、ともに、インダスの地における文化発展の初期形成期（phase）、ないしは初期の都市文化相^{アーバン・フェーズ}をなすのである」〔「」内は原文イタリック〕。インダス文明の初期段階と成熟段階の間には、文化的断絶はなかった。その文化発展と変容の過程は、前第4千年紀の終わりから第3千年紀の中葉にいたるまで一貫してつづくものであり、さらにそれは、文明の衰退にまでいたるのである。

II: インダス文明形成期の諸文化をめぐる概念規定

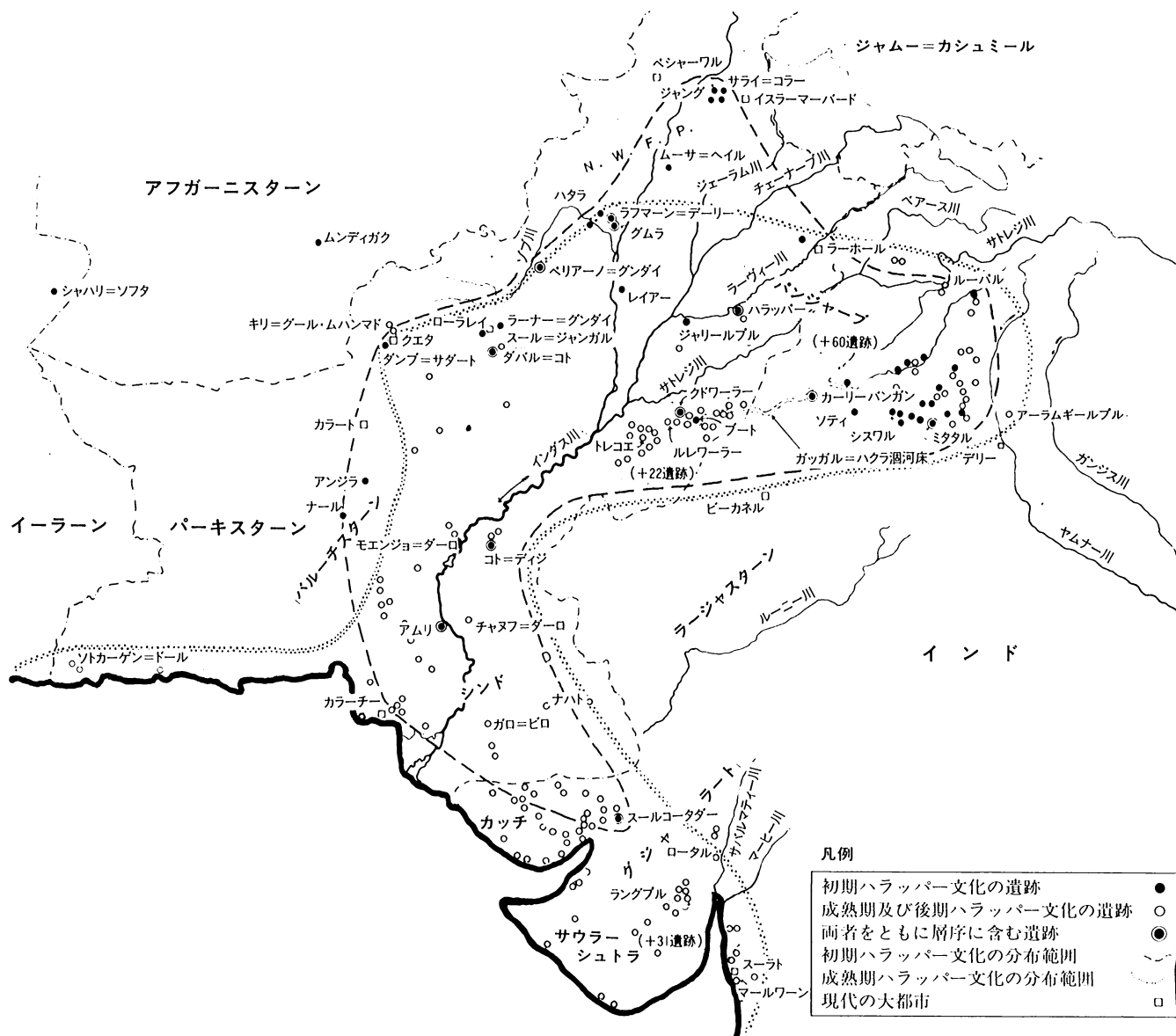
ムガル論文は以上で終わる。さてインダス文明の起源に関しては、ムガルもいうように、その発見以来、えてして何らかの「西からの伝播」、すなわち「先進」地域であるメソポタミアやイーラーンからの文化伝播ないしは刺激の伝播が想定されがちであったことは否めない。1922年にモエンジョ＝ダーロに最初の鋤を入れた発掘者のラカル・ダース・バナルジーにして、当初は、この文明がミノア文明と関係があるのではないかと考えたのである³³⁾。またこの未知の

文明発見の報をうけたイギリスでも、セイスは南西イーラーンのスサの文化との類似を直ちに指摘し³⁴⁾、ガッドやシドニー・スミスも、シュメール=バビロニアの文明との比較を行なって、両文明の強い相関関係を示唆した³⁵⁾。一方、はじめてこの文明の発見をイギリスに報じたマーシャルが、この点に関してはやや慎重であったのは興味深い³⁶⁾。彼もまた、インダス文字が「ミケーネの絵文字」と似ていることを指摘しているが、それでも彼はこの文明の独自性を認め、それが単に、西方からの文化や民族の侵入によって成ったものとはいいたくないとしている。

「西からの伝播」が、実際に一群の人びとの移動=移住によってなされたと想像したのは、D.H. ゴードンである³⁷⁾。彼は、シュメールとエラムの初期王朝時代の都市生活の知恵を身におびた人びとが海路を通じて到来し、その間に身につけた「海洋的变化」(‘sea-change’)をも伴って、新環境に働きかけたものと考えた。逆にG. ダニエルは、インダス文明の起源が「シュメール人からの刺激伝播」によるものであることを本質的に認めながらも、むしろその伝播に一役買ったのは、「シュメールへの旅から帰ってきた……北西インド村落出身」の人びとであったろうと想像した³⁸⁾。しかしいずれの説もやや極端であり、その論の根拠としての考古学的証跡は乏しく、推測の域を脱していない。

それに対し、インダス文明の諸問題に関して常に大きな影響を与えてきたウィーラーは、必ずしもこのような知識の伝播には大量の民族移動を想定する必要がないとした。彼は、「アイディアには翼がある」という名文句をもって、前第3千年紀に西アジアに広くひろがっていた「文明」に関するアイディアのインドへの伝播を主張したのである³⁹⁾。「伝播したアイディア」がやや抽象的なものであったがゆえに、インダス文明は、メソポタミア文明とは異なる実質上の個性を發展させ、保ちえたと考えられることもあって、この説は多くの学者たちの賛同をえた。さすがに今日では、インダス文明を、より西方の文明の派生物か植民地とみなすような極端な立場は影をひそめたが、それでもウィーラーのいうような西からの「翼をもったアイディア」が、はじめてインダス文明にその発展の方向性を指示したにちがいないと考える人びとは今だに数多い。

それに対し、前稿にムガルもいうように、インダス流域そのものの生態学的環境と、当地の人びとの才能を無視すべきではないと考えるインドの学者たちから、土着の起源を強調する立場もでてきた。1964年にプネーのデカン・カレッジで開かれたシンポジウムでのA. ゴーシュの発言は、その一つの典型例であ



ハラッパ文化と「初期ハラッパ文化」の遺跡の分布。両者の分布範囲の重なりに注目せよ。

る⁴⁰⁾。つとに1950年代初頭にカーリーバンガンを含む北部ラージャスターン地方を調査したゴージュは、文明以前の文化であるソティ文化の存在を明らかにしたが⁴¹⁾、彼はその文化を原ハラッパー文化 (Proto-Harappan culture) として位置づけ、ハラッパー文化の祖型をなすものと考えた。そして彼は、都市文明のアイディアが西から伝わったとしても、それを受け入れたのはこの文化的母体であったと考えたのである。

近年のS.P. グプタによる所説も、本質的にその延長線上にある⁴²⁾。彼は、原ハラッパー文化としてのソティ文化が、旧サラスヴァティー川 (現ガッガル＝ハクラ涸河床) 流域において、他地域の同時期の諸文化を総合的に再編した結果、ハラッパー文化を生み出したものと考えている。一方D.P. アーグラワールは、インダス平原に広がる文明以前の諸文化が、やがてインダス文明の母体としてのハラッパー文化となったことを認め、しかも都市化をとげなかった同時期の村落においては、先ハラッパー諸文化はそのままの形で村落文化中に残存したとする⁴³⁾。この説は、2つの点で興味深い。すなわち彼は、「先ハラッパー諸文化」とはいえ、それとハラッパー文化との間に必ずしも断絶をみていない。この点においては、それはムガルの所説にもつながるものをもっている。また、先ハラッパー諸文化がハラッパー期に残存する、という点に関しては、実際最近明らかになってきた証跡によってあとづけられる。すなわちグジャラートのカッチ地方や東部パンジャブ地方のようなやや辺境の地においては、スールコートダー⁴⁴⁾やシスワル、ミタタル⁴⁵⁾にみられるように、ハラッパー文化層中に、ソティ文化やコト＝ディジ文化の土器を思わせるものが混在していることが認められるからである⁴⁶⁾。

さて、ソティ文化、コト＝ディジ文化などと名づけられてきたこれらの「先ハラッパー諸文化」は、真にムガルのいうように、「初期ハラッパー文化」、もしくはハラッパー「文化の初期の文化相」^{フーズ}として認められるのであろうか。問題は、上にも垣間みたように、もう少し複雑であるようにみうけられる。この点をめぐって、ことにムガルの所説を中心に、以下で考えてみることにしよう。

ムガルの論点を整理してみると、次のようになる⁴⁷⁾。すなわち彼によれば、これまで規定されてきたような形でのハラッパー文化層の下にみられる文化は、コト＝ディジ下層の「コト＝ディジ文化」であれ、「ソティ文化」であれ、ハラッパー城塞下やグムラ、サライ＝コラー、ジャリールプルの下層であれ、

いずれも非ハラッパー文化たる「先ハラッパー諸文化」^{プレハラッパー}なのではなく、「成熟期^{マチュア}（盛期）ハラッパー文化」の初期の文化相をなす、「初期ハラッパー文化」の様相を個々に示すものに他ならない。したがってこれらの‘assemblages’（ムガルはそれらをそれぞれ個有の‘culture’とは認めていない）は、彼のいう「ハラッパー文化」（すなわちインダス文明）の、‘Early Formative/Early Urban/Early Developmental phase’をなすにすぎないもののようにみうけられる。すなわち彼は、これら assemblages 間の均一性を強調するあまり、その個々の特徴を「地方差」としてのみとらえ、これらをすべて、「インダス文明」という、より大きな概念にも匹敵するような「ハラッパー文化」なる大枠のうちに、単なる一文化相^{フェーズ}として短絡してしまうのである。しかし、もしこれらがハラッパー文化中の一文化相であるならば、これをしも「初期ハラッパー文化」とよぶこと自体が矛盾をおこすことになるろう。またムガルは、ここに訳出した論文の後半にもみられるように、これを「初期ハラッパー時代」^{ペリオド}ともよんで、いっそうの混乱をまねいている。彼の文脈からすれば、これは厳密には、「ハラッパー文化の初期文化相^{フェーズ}（ないしは段階^{ステージ}）にあたる時代」とされるべきものであろう。

昨今では、ムガルらの努力もあいまって、英米・インドの多くの学者たちも、次第これらの諸文化（ないしは assemblages）を、インダス文明形成のための重要な母体をなすものとしてとらえるようになってきた。その性格において、これらの諸文化は、「原ハラッパー」としての性格をもつものであり、またこれらがともに、インダス文明の形成段階（Formative stage）をなすものであることに、ほとんど問題はない。後述するように、インダス文明の形成にあたって、仮りに外来の文化要素（ないしは文明に関する概念）の伝播・導入・フュージョンがあつたにしても、それを受け入れ、消化し、自己発展させるための母体としてこれらの諸文化が果たした役割は決して否定できないからである。

しかしこれらの諸文化を、遺物の assemblages としてとらえたにしても、考古学にいう‘culture’とは、厳密には、（それはまた限界でもあるが）、一定の遺物の地域的な assemblage をさすもの^{プロトタイプ}と考えるのがふつうである。したがって、これらの assemblages が、その性格上ハラッパー文化の原型（proto-Harappan type or Harappan Prototype）をなすものであり、総じてインダス文明の Formative stage をなすものであつたにしても、その考古学的証跡における実体は、遺物構成や地域差をも無視しえぬ cultural assemblages、す

なわち ‘cultures’ としてとらえられてよいように思われる。

たしかにそこには遺物上の均一性もあり、密な相関関係を見無視することはできない。したがって、必ずしもハラッパー城塞下、ジャリールプルII、グムラII-III、サライ＝カラー IIなどを、すべてそれぞれ別個の文化と認める必要はない。それこそが文化相としてとらえられるべきものである。しかし「文化」のレベルでは、少なくとも現段階においては、「ソティ文化」に典型的文化要素を強い特徴とする北東地域の assemblages と、「コト＝ディジ文化」に典型的文化要素をその特徴とする、より南西方の assemblages の2群を判別しておく方が、かえってその相関関係や時代・地域差を今後検討する上で必要なのではないかと思われる。「コト＝ディジ文化」、「ソティ文化」の呼称が、ことにその土器形式を重視したものであることは認めざるを得ないが、このような、よりきめの細かい概念規定を残した上で、グムラII-III、ないしはジャリールプルIIなど、個々の遺跡に明らかにされた assemblages の地域・編年上の位置づけが、今後も慎重になされるべきであろう。

なおオーチンは、インダス文明に先立つ諸文化を pre-Harappan cultures (or settlements) としてとらえ、それらを土器の特徴によって、南方（アムリ文化）・中央（「コト＝ディジ文化」及びハラッパー城塞下の「文化」）・北方（「ソティ文化」）の3グループに地域上区分した⁴⁸⁾。しかしこのうち、彼のいう「南方」すなわちアムリ文化は、層位上先ハラッパー期であるのみならず、その性格の上からも先ハラッパー文化であることから、北方・中央グループとはやや文脈を異にしている。むしろそれは、パルーチスターン丘陵部に展開した初期農耕諸文化の文脈において考えられるべきもの、という性格が濃厚である。むしろハラッパー文化の母体として「原ハラッパー」の性格をもつものは、オーチンのいう北方と中央グループであり、彼はこれらを総称して、‘pre-Harappan culture in the Indus Valley’ とも、単数扱いで呼んでいることは注目される。

上述のように、先ハラッパー期の諸文化には性格の異なる2種のものがある。この点を勘案して、デイルズは、1971年の南アジア考古学シンポジウムにさいし、インダス文明・初期インダス諸文化・先インダス諸文化の3呼称の使用を提唱した⁴⁹⁾。すなわち彼は、ムガルのいう「初期ハラッパー文化」に等しい、いわば原ハラッパー文化としての性格をもつ「初期インダス諸文化」(Early Indus cultures) と、アムリのような、必ずしもハラッパー文化に直接

つながらず、また時期上もっと早い諸文化をも含めた「先インダス諸文化」(Pre-Indus culture) とを区別して、「インダス文明」(Indus Civilization) に対置したのである。しかし、「文明」と「文化」を概念上並置すること、また「インダス」の語を再びもちこむことには大きな疑問があり、デイルズの意図はともかくとして、その実際の使用に賛同することはできない⁵⁰⁾。

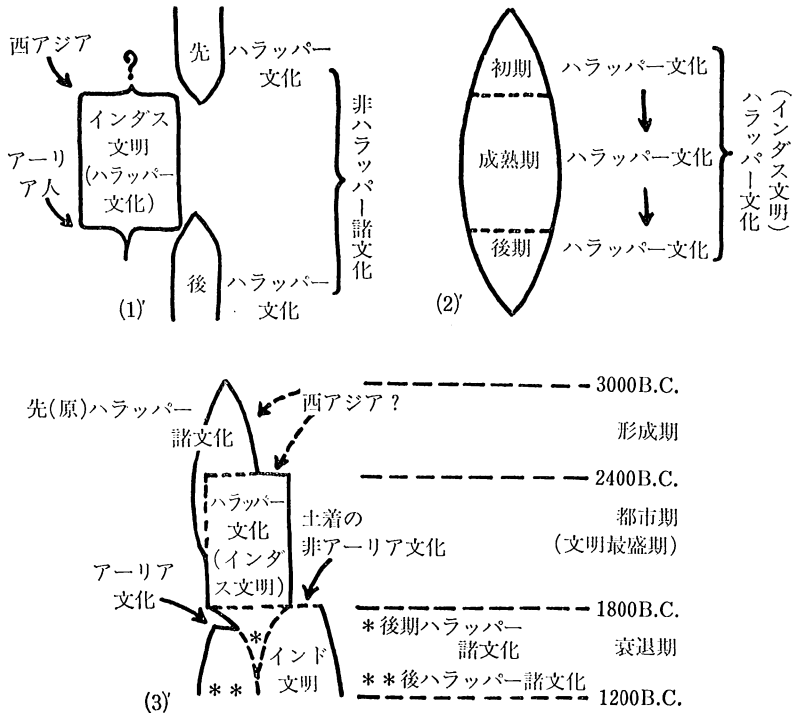
この点では、むしろムガルの1070年の学位論文に提唱された ‘Muture Harappan’, ‘Early Harappan’, Pre-Early Harappan’の方が、まだその意図も、より正確に伝わって妥当である。しかしその前2者を、単一の「ハラッパー文化」の初期と成熟期(盛期)の2文化相と考えることには、前述のように問題がある。そこで筆者は、「ハラッパー文化」と「先ハラッパー諸文化」の伝統的な呼称を享けた上で、後者は「先」とはいえそれは層序上でのことであり、その性格からいえば「原ハラッパー」としての性格をもつものと再規定したいと考える。一方‘Pre-Early’ないし‘Pre-Indus’とされた諸文化は、あえてインダス文明やハラッパー文化に対する範疇化を行なうことなく、個々の文化の呼称(たとえばアムリ文化、ナール文化、カラート文化、クエタ文化等等)を用いればよからう。それでもなお「^先」の語に、ハラッパー文化との断絶が感じられ、デイルズのいう‘Pre-Indus’諸文化との判別があいまいになるとの批判があれば、筆者は必ずしも、「原ハラッパー諸文化」の呼称(その内実は、とりあえずソティ文化とコト=ディジ文化)を拒むものではない。そしてこの用語から、いずれ「諸」の字がとれる目のくることも、考古学的証跡の今後の集積如何によっては、ありうるかもしれない。

とはいえ、インダス文明ないしはハラッパー文化が、この先(原)ハラッパー諸文化自体の有機的発展のみによって、その当然の帰結のように出現したわけではない。両者に共通の文化要素が数多く、おそらくはこれらの原ハラッパー諸文化がハラッパー文化の物質的基盤の基本部分をなすものであったにしても、計画都市のプランニング・発達した文字・精巧な印章・銅器や人偶の多用などといった都市文明に典型的な諸様相が、やがて前2400(ないしは2350)年ころに新たに出現することは、決して否定しえない事実であろう。たしかにそこには、必ずしも文化や住民の突然で大きな交替はなかったろうが、おそらくこの段階において、何らかの新たな文化的衝撃が加わったのではなからうか。すでにくりかえし述べてきたように、当時の先住民の諸文化は、それを受けとめ、導入し、発展させるだけの力を十分に備えてはいた。しかしこのような都

市化への‘take-off’にあたっては、文明形成母体における「内爆発」⁵¹⁾のみならず、何らかの外的刺激がそこに加わったことも、可能性として考慮されてよからう。

この点に関し、たとえばフェアサーヴィスは、インダス文明の起源に関して3つの要因を想定している⁵²⁾。外的影響の要因 (outside influence factor) と、高い農業生産性を約束するインダス流域の生態学的要因 (subcontinental setting)、そして文明形成を用意する社会的諸変革 (social readiness) の3点である。第1点よりも第2-3点の要因に傾聴すべき論があるが、ここでは今は立ち入らない。一方彼のいう外的要因とは、メソポタミア初期王朝時代に発する文化東漸の波である。彼はそれがイーラーン高原からアフガン＝バルーチ高地に伝播し、さらにインダス平原に至ったように考えているが、この点にはやや議論が必要である。たしかにこの時期におけるイーラーン高原の文化展開は、アフガン＝バルーチ高地を通じて、先ハラッパー諸文化の形成・発展と密接なかかわりをもつものであった。このことは、ムガルも指摘する、アフガン＝スターン・イーラーン・トゥルクメニアの諸遺跡に及ぶ広域にわたるラピス＝ラズリやクロライト交易のあり方とも関連しており、さらに巨視的には、当時南西はフジスターン地方のスサから、北はカスピ海南岸のヒッサール、東はシースターン沙漠のシャハリ＝ソフタ、南東はケルマーン地方のテペ＝ヤヒヤーにまで広くひろがっていた、いわゆる原エラム文化⁵³⁾を中心とした交易圏との関連において考えねばならない問題である。

しかしハラッパー文化（インダス文明）の興起をむかえる前2500年ころとなると、かつてイーラーン高原を中継して積極的に行なわれていた陸上交易は凋落し、インダス平原部へは、これまでの、クエタなどの中部バルーチスターンを中継せずに、おそらくは海路をも経て、アラビア海マクラーン沿岸からさらに西方との関連がいつそう密となるのである。おそらくそのさい、これまでのクエタ文化のような中部バルーチスターンの諸文化にとってかわって、南部のクッリ文化が新たに大きな役割を果たすようになったのではないと思われる。ただしこの、前第2千年紀中葉におこった「国際関係」の変化が、インダス平原部における都市化 (urbanization) とどのようにかかわり、どのようにインダス文明を興起させたかはいまだ明らかではない。しかしこの問題は、平原部そのものにおける文化・社会の内実化の問題とともに、今後も深く考察がすすめられねばならない問題であろう。



3つの立場の図式化〔本文(1)(2)(3)はそれぞれ図(1)(2)(3)に対応〕。

今回は文明の衰亡・解体に関しては何もふれなかったが⁵⁴⁾、いわゆる後期ハラッパー諸文化や後ハラッパー諸文化の位置づけの問題をも含めて以上を要約すると、インダス文明の興亡を考える上で、大きく分けて3つの立場があることがわかる。(1)はインダス文明＝ハラッパー文化を、その先行・後続の諸文化とほとんど関係なしに、突然に出現し、滅亡したものとする立場である。(2)は先行・後続の諸文化をも、それぞれ「ハラッパー文化」の初期と後期の文化層として位置づける立場。(3)は先行・後続の諸文化とハラッパー文化自体との有機的な連関を認めながらも、なお各段階においての他文化要素の導入・関与を認めようとする立場である。

『インダス文明』(NHK ブックス)をあらわすにあたって著者らがとった立場は基本的に(3)の立場であり、それを図式化すれば(3)'のような形のものとなる。しかし最終的に採用した図式は、これとは異なった、もう少し「大

(汎) インダス流域」内における地域差をも勘案したものとなった⁵⁶⁾。その図とそれに関する解説は、同書そのものにゆずりたい。さらにややくわしい説明の要る点もあるが、これを図式化する過程で払った工夫を読みとっていただければ幸である。

なお同図に「生成期」「都市期」「衰退期」とそれぞれ名づけた年代の枠は、各期の名称とともに、なお暫定的である。生成期（形成期）の始まりをムガルは前 3200-3000（本稿では 3100）にしているが⁵⁶⁾、先ハラッパー諸文化の中でもさらに古い、ジャリールプル I、サライ=コラー I、グムラ I などを、それぞれの遺跡における II（ないしは III）とあわせて「先ハラッパー諸文化」中に含めるべきかどうか、今後も論議されねばなるまい。一方後期ハラッパー諸文化、後ハラッパー諸文化の位置づけやその概念規定に関しては、いずれ再び稿を改めねばならない点もある。しかし、とりあえずはその位置づけを、これも図 (3)' に読みとっておいっていただきたい⁵⁷⁾。

注 [注 6~32 は訳者による訳注]

- 1) Muhammad Rafique Mughal, *New Research on the Origins of the Indus Civilization. A Summary of Lecture (Sind Archives Lecture Series) given at the Hyderabad Museum, Hyderabad, Sind, on 17 January, 1980.* 同要約をお送り下さり、翻訳の許可を下されたムガル博士に深く感謝する。
- 2) Mughal, *The Early Harappen (Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan.* Ph.D. Dissertation, Dep. of Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia, 1970.
- 3) Mughal, *Present State of Research on the Indus Valley Civilization*, Dept. of Archaeology and Museums, Government of Pakistan, Karachi, 1973. (三笠宮崇仁訳「インダス文明研究の現状」, 『オリエント』 XVI-1: 161-89, 1973.)
- 4) *Sindhological Studies* III-1, Institute of Sindhology, University of Sind, Jamshoro, 1980.
- 5) 辛島 昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一『インダス文明——インド文化の源流をなすもの』, 日本放送出版協会 (NHK ブックス), 1980.
- 6) 文明の発見に関しては、たとえば曾野寿彦・西川幸治『死者の丘・涅槃の塔』, 新潮社, 1970: 27-57. またその考古学史的背景に関しては, Sourindranath Roy, *The Story of Indian Archaeology 1784-1947*, ASI, New Delhi, 1961 etc.
- 7) 考古学上の「文化」, すなわち遺稿・遺物の一定の assemblage は、ふつう最初に発見された遺物の名をとって命名されるので、この場合それを「ハラッパー文化」とよぶことは正しい。ただし、この「文化」を物質的基礎として成りたっ

た、高度に発達した都市的な社会=経済的秩序の総体をさすときは、ハラッパー文明ではなく「インダス文明」とよぶべきであろう。なお邦語文献に散見される「インダス文化」なる用語は、意味をなさぬばかりか、混乱をまねく。

- 8) ただしその分布は、この範囲すべてに一樣に密であるわけではない。本稿の遺跡分布図参照。
- 9) オクサス南岸, Kokcha 川との合流地点に近い Shortogai 遺跡。文献は Bertille Lyonnet, Découverte de Sites de l'âge du Bronze dans le N.-E. de l'Afghanistan: leur rapports avec la civilisation de l'Indus, *Istituto Orientale di Napoli, Annali* XXXVII: 19-35, 1977; H.-P. Frankfort et M.-H. Pottier, Sondage Préliminaire sur l'établissement protohistorique Harappéen et post-Harappéen de Shortogai (Afghanistan du N.-E.), *Ars Asiaticus* XXXIV: 29-79, 1978.
- 10) Ghaggar-Hakra 河系の流域, ことに Cholistan (Bahawalpur) における最近の調査報告は, Mughal, New Archaeological Evidence from Bahawalpur, *Man & Environment* IV: 93-98, 1980. なお 'Greater Indus Valley' は, Mughal の頻用する概念である。
- 11) 文明都市期の年代に関してはさまざまな議論があるが, ここではその詳細には立ち入らない。注5及び本稿第II部参照。
- 12) Vide N. G. Majumdar, Exploration in Sind, *Mem. Arch. Surv. Ind.* No. 48, New Delhi, 1934.
- 13) Wheeler の指導によって行なわれた, パーキスターン考古局最初期の発掘調査。Vide *Pakistan Archaeology* 1: 38-39, Karachi, 1964.
- 14) いわゆる 'Pre-defence layer'. Vide R. E. Mortimer Wheeler, Harappa 1946: the Defence and Cemetery R-37, *Ancient India* 3: 58-130, New Delhi, 1947.
- 15) たとえば A. Ghosh et. al., The Indus Civilization: Its Origins, Authors, Extent and Chronology, in V. N. Mishra & M. S. Mate eds., *Indian Prehistory 1964*, Deccan College, Poona: 113-36; W. A. Fairervis, The Origin, Character and Decline of an Early Civilization, *Novitates* No. 2302, 1967.
- 16) F. A. Khan, Excavations at Kot Diji, *Pak. Arch.* 2: 13-85, 1965. ただし Khan は, Mughal が本稿にいうように, コト=ディジ文化をインダス文明の 'early developmental phase' と自ら規定していたわけではない。
- 17) H. N. Michael & E. K. Ralph, *Dating Techniques for the Archaeologist*, Boston, 1971; G. F. Dales, Archaeological and Radiocarbon Chronologies for protohistoric South Asia, in N. Hammond ed., *South Asian Archaeology (for 1971)*, London, 1973: 157-170.
- 18) 「初期ハラッパー文化」という概念をめぐるの問題は, 本稿第II部を参照。
- 19) いわゆる短頸球状壺に近いもの。ただし彩文上の類似はない。なお近年先ハラッパー土器の形態分類を行ない, ハラッパー土器との比較を行なった中山誠二氏

によれば、少なくとも土器にみるかぎり、現在知られている先ハラッパー文化中に、真（成熟期）ハラッパー文化の直接の祖型をみいだすことはできないという結論をえたという。Vide also: Omi Manchanda, *A Study of Harappan Pottery*, Delhi, 1972.

- 20) Bhoot: Mughal, *op. cit.*, 1980. 本注 10.
- 21) Mughal, New Evidence of the Early Harappan Culture from Jalilpur, Pakistan, *Archaeology* XXVII-2: 106-113, 1974.
- 22) Muhammad Abdul Halim, Excavation at Sarai Khola, Pt. 1 & 2, *Pak. Arch.* 7: 23-89; 8: 1-112, 1972.
- 23) Gumla: Ahmad Hassan Dani, Excavations in the Gomal Valley, *Ancient Pakistan* V: 1-177, 1970-71.
- 24) ペシャール大学の Farzand 'Ali Durrāni 教授による発掘。資料未刊のため、とりあえず 拙稿「インド・パキスタン考古学の最近の動向」『考古学ジャーナル』154: 2-7, 1978. また石器に関しては Farid Khan, A Preliminary Report on the Microlithic Blade Industry from Rahman Dheri, in Maurizio Taddei ed., *South Asian Archaeology 1977*, Napoli, 1979: 375-403.
- 25) Jean-Marie Casal, *Fouilles d'Amri*, Paris, 1964.
- 26) Kalibangan の報告も未刊. *Indian Archaeology* 1060-69 の諸巻参照。その文献の詳細は、平凡社『世界考古学事典』「カーリーバンガン」の項（拙稿）参照。
- 27) カーリーバンガン下層（I 期）の文化すなわちいわゆるソティ文化とコト＝ディジ文化との関連には、いまだ大きな検討の余地がある。
- 28) 1970年に提出された Mughal の学位論文。注 2。
- 29) 前注 24 の拙稿参照。
- 30) 地図は Mughal, *op. cit.*, 1974, 注 21 にもとづき作図。したがってそれ以降に発見されたジャムー地区のマーンダー、北部アフガーニスタンのショルトガイ等、北方の新遺跡は含まれていない。
- 31) Georgina Hermann, Lapis Lazuli: the Early Phases of Its Trade, *Iraq* XXIV: 12-15; C. C. Lamberg-Karlovsky & Maurizio Tosi, Shahri-Sokhta and Tepe Yahya: Tracks on the Earliest History of the Iranian Plateau, *East & West* XXIII-1/2: 21-53, 1973.
- 32) 拙稿「バハレーン考古紀行」1-4, *Circum Pacific* 8-10, 1977-8 に言及された諸文献；ことに Grace Burkholder, Steatite Carvings from Saudi Arabia, with Excursus by Edith Porada, *Artibus Asiae* XXXIII-4: 306-31, 1971 ほか。
- 33) R. D. Banerji, Explorations and Research, Mohenjo-daro, *Annual Report, Arch. Surv. Ind.* (1922-23): 102-104, 1923.
- 34) A. H. Sayce, Remarkable Discoveries in India, *Illustrated London News*, Sept. 27, 1924: 566.

- 35) C. J. Gadd & Sidney Smith, *The New Links between Indian and Babylonian Civilizations*, *ibid.* Oct. 3, 1924: 614-6.
- 36) John Marshall, *First Light on a Long-Forgotten Civilization*, *ibid.* Sept. 20, 1924: 528-532, 548.
- 37) D. H. Gordon, *The Prehistoric Background of Indian Culture*, Bombay, 1958: 60.
- 38) Glyn Daniel, *The First Civilizations: The Archaeology of Their Origins*, London, 1968 (坂本完春訳『文明の起源と考古学』, 社会思想社, 1973: 115-7).
- 39) R. E. Mortimer Wheeler, *Ancient India*, in Stuart Piggott ed., *The Dawn of Civilization*, London, 1961: 248, etc.
- 40) 前注 15 の Ghosh の発言。
- 41) A. Ghosh, *The Rajputana Desert—Its Archaeological Aspect*, *Bull. Nat. Inst. Sci. Ind.* 1: 37-42, 1952; et al.
- 42) S. P. Gupta, *Origin of the Form of Harappan Culture: A New Proposition*, *Puratattva* VIII: 141-46, 1975-76.
- 43) D. P. Agrawal, *Genesis of Harappan Culture*, *ibid.* VI: 37-41, 1972-73.
- 44) *Ind. Arch.* 1970-71: 13-15; 1971-72: 13-21; また拙稿「インダス文明第5の都市・スールコートダーの発掘」『考古学ジャーナル』131: 5-8, 1977.
- 45) Suraj Bhan, *Excavations at Mitathal (1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*, Kurukshetra Univ., 1975; S. Bhan & Jim Shaffer, *New Discoveries in North Haryana*, *Man & Environment* II: 59-68, 1978.
- 46) これら先ハラッパー文化の諸要素は、ハラッパー文化の文脈中に混在しているのであって、層序上ハラッパー文化以前の層をなしているわけではない。前掲のムガルの地図によれば、シスワルが「初期ハラッパー遺跡」、ミタタルが「初期・成熟期両文化の共存」となっているが、この点やや注意を要する。前掲NHKブックス『インダス文明』: 44-45 参照。
- 47) 邦語文献では、すでに桑山正進氏がムガルの所説を7点にわけて紹介しているが(「インダス文明に関する最近の理解」“MUSEUM” 293: 4-11; esp. 10, 1975), 以下ではその第1点, すなわちムガルのいう‘Mature Harappan’に対する‘Early Harappan culture’なる概念についてのみ, コメントする。
- 48) Bridget & Raymond Allchin, *The Birth of Indian Civilization*, Harmondsworth, 1968: 112-25.
- 49) G. F. Dales, *Archaeological and Radiocarbon Chronologies*, *op. cit.*: 162 ff.
- 50) Wheeler, *The Indus Civilization*, 3rd. ed., Cambridge, 1968: 2 (Terminology). また前注 7 参照。
- 51) Lewis Mumford, *The City in History*, New York, 1961 (生田勉訳『歴史の都市・明日の都市』, 新潮社, 1969).
- 52) W. A. Fairservis, *The Roots of Ancient India*, Chicago, 1971: 217-39.

- 53) Lamberg-Karlovsky & Tosi, *op. cit.*, 注 31; Pierre Amiet, Archaeological Discontinuity and Ethnic Duality in Elam, *Antiquity* LIII: 195-204, 1979.
- 54) 拙稿「インダス文明の解体」『古代文明の謎と発見』2, 毎日新聞社, 1977参照。
- 55) 『インダス文明』(NHK ブックス): 17. なおこの図式は, 拙稿「インダス文明の興亡」『インド国立博物館』, 世界の博物館 20, 講談社, 1979: 35の図式をもとにして成った。
- 56) Mughal, *op. cit.*, 1970 (注2の文献) では前3000年, 1974 (注21の文献) では3200年, 本稿1980 (注1) では再び年代をやや下げて, 3100としている。
- 57) 本稿をなすにあたって 御教示下さった G. F. Dales, M. R. Mughal, 辛島昇, 山崎元一, 桑山正進, 中山誠二の諸氏に感謝する。なお本稿は, 1980年度法政大学研究助成金による成果の一部である。

追記: なおムガル博士は, その後バハレーン首長国国立博物館付・考古学担当官となられた。インダス文明との関連をかんがみるとき, その活躍が大いに期待される。